

教育科学研究会通信

京都教科研例会案内 363 号

5 月号

二条城周辺



日時 2023 年 5 月 20 日 (土) pm6 : 30 ~ (日程変更注意)
場所 乙訓教育会館 (ハイブリット開催)
内容 第 346 回 5 月京都教科研特別例会

提起

教師＝専門職の誇りのありか

—教育 5 月号第 1 特集を読む—

提起 井上 力省 (事務局)

教師の仕事の誇りが奪われています。2019 年型教師が増えているともいわれます。そういう中で専門職としての教師のありかについて考えてみようと思います。みなさんの参加をお待ちしています。ハイブリット開催なので参加希望の方は事務局まで連絡ください。

363 号目次

1, 5 月例会案内		1
2, 4 月例会報告	野中一也	3
	なぜ 人は人を殺すのか (戦争責任を考える)	
3, わたしの研究ノート (26)	佐藤年明	7
4, 連載 (8) 子育てと共同	大西真樹男	13
5, 編集後記・ニュース		14
資料	梶原と戦争	岸本清明

京都教育科学研究会第345回4月例会の報告の報告

はじめに

4月例会は1月の野中顧問からお話ししていただく予定だった内容をさらにバージョンアップして、戦争責任について提起していただきました。それぞれの問題意識を交流し、野中顧問の提起をうけ深めていきました。

提起

戦争責任について考える
なぜ 人は人を殺すのか

提起 野中一也顧問
指定討論 佐藤広美前教科研委員長
渡部太郎京都教科研代表

今後の例会予定

基本的に第3土曜です。場所は乙訓教育会館。すべてハイブリット開催の予定です。

- 6月例会 関西教科研に合流 6/24(土曜)西宮勤労会館 高橋哲講演
教師が本当にしたい仕事とは(仮題)詳細 次回
- 7月例会 7/15 7月号 第1特集 ことばの獲得 提起 寺井さん
特集の扱いは第1、第2変更あり(詳細は通信でお知らせします)

問題意識の交流・はじめに

4月例会は東京から佐藤広美前教科研委員長が参加してくださいました。野中顧問の娘さん お孫さんも参加して下さり、充実した時間がもてました。

- 「1月の時にきけなかった話が直に聞けてわくわくする」
- 「戦争体験はないけどぜひ 野中顧問の体験を聞きたい」
- 「ウクライナとロシアの戦争をどうみたらいいのか考えてみたい」
- 「戦争責任とは何か 新たな問いをもちたい」

などなど いくつか問題意識、期待がそれぞれ語られました。野中提起のあと、指定討論として渡部代表の発言 続いて佐藤前教科研委員長の発言をお願いして全体の交流にはいりました。以下 講演レジメと記録です。

はじめに

- ① 妻の最期 2/2 「荘厳な死」「永遠」「絶対矛盾的自己同一」「無」→理想
- ② いま（今）？ 「敵基地攻撃」 戦争の想起を！ どう生きるか？
- ③ 「忘れられる戦争責任」の問題 「日の丸」「君が代」 大国旗行進

I 「戦争」に関わる私的な体験

- ① パラオ時代（1937年） 日本の植民地支配
現地人を「土人」として使用 父戦争予感で帰国要請 後ほど玉砕の悲劇
1938年 南京大虐殺 cf. 辺見庸『1937』
- ② 根室町「落石無線電信局」（1941年） 国家への「忠誠」
国民学校1年生 奉安殿 12/8 大東亜戦争 集団登校 戦争ごっこ
父 精神科入院 「お前の父さん、狂った！」
- ③ 銭亀沢村の函館無線電信局（1943年） 地域間格差の差別
異質の生徒集団 「無線の坊ちゃん、今流行った」といじめ 落し穴 お金落とし
父の後任の人が空襲で死亡 無線局は空爆対象？
- ④ 小樽無線電信局（1944年） 「精神的自由」の不在
防空壕掘りが朝鮮人の作業 朝鮮人蔑視 空襲警報 訓練 空襲
日本の高射砲隊の無力さ 失望
1945年8月15日敗戦玉音放送 担任「帰りなさい」とだけ、無言
異常な静かな静けさ？ 生徒は雑音多くて意味分からず
帰宅後、父は「負けた」「あんなもんだ」 父の不信さ 父「真岡9人の乙女」

戦時体制と敗戦後の「変化」

- 断絶の教育改革 奉安殿が静かに消える
教科書に墨を塗る ① 物質的な環境破壊
先生方が急に優しくなる ② 画一化からの喜び
- ⑤ 新制中学時代（1947年） 6・3制スタート
小学校に併設中学校 担任の斉藤先生に新しい「時代」を感じる

叔父（父の弟）の中支からの帰国

徴兵検査で甲種合格 「立派な兵士」
中国で中国人の首を刎ねる 精神科に入退院を繰り返す 廃人の自己責任！
精神的に父に依存

⑥ 大学での出会い

勝田守一 戦争責任を意識下に生きる
高坂正顕 皇国史観で戦争責任をスルー

II 戦争責任をどう考えたらよいか

① 戦争の犠牲者をどう見るか 悲惨な実態把握を！

戦場に行った兵士 兵士の家族たち 軍属で協力した人達
犠牲者数をどう見るか 日本人 210 万、外国人 2000 万？

② 天皇の戦争責任

開戦、敗戦の詔勅発布の「お言葉」 最も重い責任
戦前は「現人神」の「超人間」である 「生き神さま」とも呼ばれ「服従」
戦後「我（朕）人間である」と宣言 天皇とマッカーサーとの写真
日本人の精神的「支柱」となった事実の歴史的意味

③ 朝鮮・韓国への歴史的侵攻の責任

韓国、朝鮮への民族差別の土壌形成 多方面にわたる未解決問題
「創氏改名」「朝鮮神宮」などの精神的侵害 「従軍慰安婦」人権
北朝鮮での問題は全く視野にもない 日本が北朝鮮を作った

中国の毛沢東は「罪を憎んで人を憎まず」と発言
非人間的行為は絶対に忘却不可

④ 日本国民の戦争責任

日常生活が軍国主義体制へ強制的移行 貧困生活に忍従
「勝つまでは欲しがりません」などのスローガン唱和 「隣り組み」制度
戦争協力のための強制的「供出」 その雰囲気づくり
「聖戦」支援の感性的支持 「めんこい子馬」 指導者の自らの反省

⑤ 国民の超国家主義的「皇国」支持

日本ナショナリズムと共振した責任 踊る安倍晋三
少数だけれど反戦を貫いた人達の存在

⑥ 過去の「悪」の想起→平和への必然性

「人を殺す」実相

⑦ 内心の「悲しみ」の深化→超越的美へ→絶対的世界平和

討論・交流

以下、正確な録音おこしではありません。吉益の覚書です。ご容赦を。

渡部：貴重な話 生と死 絶対的矛盾から今がある。葛藤を感じた。私たちの日常。先日ミサイルの報道を聞き驚いた。異常な報道代表の。戦争の足音を実感した。体験された野中氏のことばから考えさせられた。自分が伝えていかなければと思った。戦争中の国民構造をあらためて考えた。戦争を忘却してはいけない。大学で学んだが、戦争で精神を病む、通常精神ではできない。悪と向き合う中で精神の回復をしてきた。向き合うことの意義。戦争から学ぶことはたくさんある。誠実さ。そこに未来志向があるのでは。

佐藤（広）：悪の想起 悲しみの深化 この二つが大きな課題。子どもたちと深めていきたい、ここが戦後教育学の本格的問題だと思う。「真岡9人の乙女」話 大切だ、女の子が死んでいった。これを書き残した意義なぜ自殺しなければならなかったのか。どう考えていけばいいのか。勝田と高坂の比較。勝田 悪、悲しみの想起を論文に深く書いていたのでは。シェリングの研究の根幹をとらえていないのではないか。そこに論じた勝田の意義は大きい。高坂はどんな人だったのか。京都学派四天王の功罪、戦後 どう生きていったのか？高坂は「期待される人間像」を書いた。どう生きていったのか。京都学派すべてではないか。田邊元などはどう生きていたのか。勝田の歩みと比べてみたい。

葉狩：教科研の大会初めて参加した時、野中さんにはじめてお会いして励ましてもらった。藤岡信勝の生き方については色々思うが戦後史については色々考えた。野中体験と自分の父母を重ねて聞いていた。深めなければならないがなかなかできない。

芦田：戦争体験について深まった。ウクライナ 戦争は人を殺し合うものだ。自らの実践をふりかえってみた。敵基地攻撃ということばについても再度 考えてみたい。戦争は殺しあうことで、あってはならないこと。軍隊では、平和は守れず、つくれないこと憲法9条によって、日本は戦場で兵隊を殺すことも殺されることもなくこれた。これによってもわかるように、平和な国際社会を作るのは外交交渉と平和条約である。これは、中国や韓国が軍事化しようと思われない真実である。今の情勢こそ、それを強く感じる。以上のことを、日本のマスコミは国民に知らせようとせず、公教育では教えない。閣議決定という大本営発表で、あやまちを繰り返しつつある。この流れどうして止めるのか。反戦を叫ぶ人を一人一人増やすことで間に合うのか、間に合わなくてもやるしかない。

野中コメント 戦争体験 間接経験だけでは難しい 事実を目を向ける 想像力をつける どういう状況に置かれているかを考える。高坂は悪の巨人 京大の中での支配 金の支配で人をてなずける？教育の専門ではない、哲学だけがすべてと思っていた。指導教官の高坂の授業色々質問した。魅力がないけど形式を大事にしていたように思う。内容から深めていかない。学徒出陣の時、高坂の人間性がでた。それが当時主流ではないか。高坂にははむかわない風潮があった。形式で中味がない。

佐藤（広）：モラルでもってアジアを統一 すぐれたのが日本民族、モラルをどう考えるか。そのモラルで日本を支配した。戦後 そこをどう総括したのか。田邊元、親鸞にたちもどる、ただ 若気の至りで逃げた 悪のことがなかったと思う。

大西：89 歳 元氣びっくり なぜ人を殺すのか 権力の問題 暴力とイコールだ。 赤ちゃんの死が続いている。 自治の問題が大事と思う。

山田：ぶれない話と感じた。問題提起された思いを深めてみたい。例会の中で「なるようにしかならない」という励ましがいつも力になった。この思想を聴きたい。

福岡：向ヶ丘 教師のおもしろさを体感した。 教育論 若い人たちが話し合う機会が少なくなっている。困難だけ次世代につなぎたいそういう若者がいる。管理主義教育がはびこるなか 管理職もおしこめられている。自分たちがしたいことを大事にしてほしい。——ためになる 役に立つ教育というスローガンをいわれるがどう生きていくのか、が抜けている。危機感をもって対処しなければならない。私は鹿児島出身で「日の丸、君が代」何が悪いのか？と思っていた。京都にきてその発想の違いがあった。事実を掘り下げる大切さを学んだ。父と戦友 生きざまを考えてみたい。

以下 当日 ZOOM が不調だったところです。(バッテリー残量減少のため) ご迷惑をかけずいません。

(野中) : 娘からみて母の死後、父は少しふけこんだなと思っていた。この企画を聞いたあと、張り切っていた。

(元気な姿をみてみたい。) そう思って参加しました。戦争体験は 以前からよく聞いていました。

(野中) 私も父の元気な姿をみようとして参加しました。戦争の事を子ども、孫に伝えたいという思いはずっと父は考えていたと思う。父の生の声が聴けてよかった。人と話すことが大好きで、少し、へこんでいると思っていたけど元気な父を再確認しました。「なるようにしかならん」は口癖で私も子育てで悩んだ時何度も聞かされました。孫にも伝えていきます。

佐藤 (年) : 自分が京大時代に野中先生と「教育を読む会」に参加していた。三重にいき、京都に戻り例会に参加しています。戦争体験は自分にはないが父母をみると戦争が影をおとしているように思う。かつて藤岡信勝氏と学んでいたときに渡良瀬川調査にふれ学んだことがある。敵基地攻撃ということばが安易に使われる中で再度、自分なりに戦争について考えてみたい。

寺井 : 色々なことを教えられました。高坂の問題点、形式だけみて内容を問わない この考えが主流で日本国民が「右へならえ」となったというのがよくわかりました。ウクライナ問題をあらためて考えてみて「戦争責任は私自身にもある」「戦後責任はある」と思った。歴史を背負わなければならないし、どう継承していくかが課題と思った。自分の父は職業軍人だった。自分史でまとめている。そこで皇国史観がどのようにして作られたかがよくわかった。「なるようにしかならん」私にも言ってください。

井上 : 高校の教師を経て大学や専門学校で教えているが、今日の野中講演を咀嚼してぜひ 伝えていきたいと思った。自分の父親は戦争に参加したが何も語らなかった。ただ「日の丸」や子どもの鉄砲遊びにたいして特別な感情をもっていたようで軍歌も絶対 歌わなかった。天皇の責任責任について「しかたがなかった」とか、いま日本が攻められたらどうするかなどの意見があるが、歴史にどう向き合うか、中間層の戦争責任が問われているように思う。大江健三郎の言葉を思い出した。

野中まとめ

ありがとうございます。自分としてはいいことがほぼいえました。もうすぐ 89 歳になりますが、まだまだ語っていきたい。18 歳の時、死に至る病にかかり、超越して生きる、目に見えないもの、大事なものを、神とは何かを考えた。そして悪と向き合う事。人間の真実などを考えた。電通大での解雇反対の経験などから、なるようにしかならんと考えるようになりました。亡くなった細野先生から教えていただいたように思います。妻との別れはつらいものでしたが妻との出会いが自分を作ったとも思います。

この企画に感謝です。345 回の例会、教科研大好きです。これからもよろしくお願いします。

「戦争責任を問う」ではなく「人はなぜ 人を殺すのか」というタイトルにしました。
と語りだされた 89 歳の野中顧問の講演は圧巻でした。元気をもらいました。そのあとの懇親会も 3 年ぶりということもあり楽しいひとときでした。野中講演にふれ参加者の方から戦争体験、それぞれの親の生き方がこもごと語られました。読者の岸本さんから貴重な記録が送られてきましたので資料として紹介します。あわせてお読みください。岸本さん、ありがとうございます。そして何より野中顧問 魂の講演 感謝です。

吉益敏文「生活綴方を実践する教師の『まじめさ』に関する考察——5人の教師の聞き取りから——」（武庫川臨床教育学会『臨床教育学論集』第14号 2022.12.10 所収）

【3回中の1回目】

佐藤 年明

今年に入って吉益敏文先生から上記の論文をご恵贈いただきましたので、今回からの3回分はこれについて書きたいと思います。

本論文の構成は以下の通りです。

問題意識と問題設定

第1章 5人の教師の語りと聞き取り

第1節 表現しない子どもの思いを大切に — 鹿島和夫氏の聞き取りから

第2節 子どもの前で謙虚に — 西條昭男氏からの聞き取り

第3節 学ぶことを大切に — C氏の語りと聞き取り

第4節 文集を作り読みあつて — D氏の語りと聞き取り

第5節 書く事・読みあうこと — E氏の語りと聞き取り

第2章 5人の語りから明らかになったこと

第3章 教師のまじめさ

終章 現代に活かす視点

問題意識と問題設定

本論文の根幹に関わる部分ですので、この項の全文を紹介します。

【今回の研究ノートで筆者は、勝田の生活綴方の思想に学び、子どもと共に生きる教育実践をめざした教師の生き方について考察した。5人の生活綴方を実践する教師の語りから教師の「まじめさ」についてまとめてみた。戦前、ほとんどの教師は「皇国教育」にすすんで貢献した。恵那の教師も、それに劣らず「皇国教育」にしたがった。このように恵那の教師は国家の教育要求に誠実に応じたが、しかし、同時に、子どもと地域の人びとの方を向くことを忘れず、その教育要求に応える姿勢を持っていた。すなわち、「子どもとともに生きる」というまじめさに注目したのである。子どもとともに生きるという「まじめさ」こそが、恵那の教師に皇国教育に従ってしまった自らの生き方を反省させ、きびしい自己批判に向かわせ、教師としての自己変革につながっていった、と勝田は考えた。勝田は恵那の教師の「まじめさ」に注目し、戦後、生活綴方教師として成長して行くその思想的根拠を探り出していった。

勝田は生活綴方教育実践の特徴について次のように書いた。

- 1、子どもは、表現によって生活を直視し、自らの感情のしこりをときほぐすことができる。
- 2、教師と子どもの間には、たえず、指導と書き直しの作業がくりかえされる。その過程の中で、お互いの共同性をつくりあげることができる。
- 3、子どもの表現活動は教師への信頼を前提とする。と同時に、その信頼をさらに深めることができる。

勝田守一 1952年「子どもの幸福をまもる教師たち」 著作集第3巻 p18

勝田が恵那の教師たちから学んだ生活綴方の思想である。勝田のこの見解を大切に、筆者は、以下で、5人の教師の「まじめさ」に注目し、彼らの生活綴方に対する語りを紹介する。】(P. 73-74)

ここで、本論文のバックボーンをなしている教師の「まじめさ」、もっと具体的には勝田が捉えた恵那の教師

たちの「まじめさ」について、本論文の中心部分の検討に先立って取り上げておきたいと思います。その際、本来なら吉益氏もそうされたように勝田守一「子どもの幸福をまもる教師たち」(1952)や勝田の同論文について詳細に考察している佐藤広美『戦後教育学と戦争体験 戦後教育思想史研究のために』(2021)の関連部分も紹介したいのですが、そこは省略させていただいてこの件に関係する最近の教育科学研究会内の議論に限って紹介します。

『教育』誌のNo. 913(2022. 2)「[特別企画]教科研再建 70 周年・教育的価値と教育実践」では、佐藤広美氏と佐貫浩氏の論文が掲載されました。

佐藤広美論文「勝田守一と『教育的価値』論」では、上記引用と同様の論点について再度以下のように述べています。(下線は引用者)

【勝田は、(中略)『教育』の再創刊号で「教育の倫理的支柱」(1951年)を論じ、侵略戦争に荷担した教師がどのようにして平和と民主主義を理念とする教育を担うのかを問い、それを可能とする根拠はかつて教師がもちえた倫理観であるとした。その倫理観を所持する典型的な存在を勝田は恵那の生活綴方教師に見出した(「子どもたちの幸福をまもる教師たち」1952年、「変革される教師像」1953年)。教育実践と子ども理解を深めようとした生活綴方教師における倫理観への注目である。

「(生活綴方教師の一人林鉦三さん)をして社会と歴史とに眼を向けさせたのは、この負い目ではなかったかと思う。この負目の自覚は、教師の純粹さとまじめさから生まれると私は固く信じている。子どもへの責任は、まず自己への鞭となり、鞭はどうしても自己変革を貫徹させないではおかないであろう。」「それは『民主教育』を上から与えられたものとして受け取ることを拒否させた。新教育は、恵那の地では、流行にはならなかった。古い日本の教育に対する克服は自己自身の厳しい批判を通過することなしに行われなかった。そこでは、古いものが古いというだけで、やぶれ草履のように捨てられることはなかった。そのようなことでは捨てる自己は変革されず、所有されたものが身を離れるだけである。」

勝田は、恵那の教師は、戦前「子どもたちとともに生きる」という誠実さとまじめさを身につけており、それ故にこそ戦後社会的関心を獲得することで自己批判と批判変革を可能にしたと述べた。】(佐藤広美「勝田守一と『教育的価値』論」『教育』No. 913 P. 58-59)

一方、佐貫浩論文「戦後教育学と『教育的価値論』」では、同じ論点について次のように述べています(下線は引用者)。

【勝田は、「子どものために」という「アプリアリ」な「まじめさ」を両義的な性格において把握し、戦時体制下でも「教師は子どもとともに生きていた」とあえて述べ、その下で多くの教師は、「その愛情と使命とを貫ぬいて、「国策遂行のための教化の役割」を担っていたと指摘する。そして戦後、その「まじめさ」が、平和と民主主義の教育への熱意に組みかえられるためには、厳しい戦争反省、戦争に対する科学的認識、教員組合運動などを通じた民主主義の体験の獲得、「日本の歴史的課題」の把握、教育実践による検証などが不可欠だとした。「子どもとともに生きよう」とする「まじめさ」の構えが、直ちに教育的価値に繋がるものではなく、時として支配の論理にすら囚われてしまう危うさをもつととらえていた(「変革される教師像」『勝田守一著作集第3巻』29, 30頁)。この留意は、継承すべきものであろう。】(佐貫浩「戦後教育学と『教育的価値論』」『教育』No. 913 P. 64)

佐藤広美氏と佐貫浩氏は、ともに勝田が捉えようとした恵那の教師の「まじめさ」、その戦前と戦後ということに注目しながらも、その評価には微妙な違いがあります。この件については教育科学研究会内での両論者のさらに立ち上がった議論も行なわれていると聞きます。吉益氏は、『教育』No. 918(2022. 7)掲載の佐藤広美『戦後教育学と戦争体験』についての書評「戦争責任に向き合う教育の思想とは」の中で吉益氏も、佐藤広美氏、佐貫浩氏が論じている教師の「まじめさ」に言及されており、その内容は本論文第3章にほぼそのまま転載されていますので、そこで改めて検討させていただきます。

第1章 5人の教師の語りと聞き取り

吉益氏は本論文において【生活綴方の実践をする5人の教師の語りと聞き取りをおこなった。】(P.74 左段)とされています。【5名とも実名での表記について同意をもらった】(同)ものの、前二者を吉益氏はすでに過去の論文・学会発表で実名紹介しているが後三者については【現在進行形で仕事をされているので倫理上の配慮から仮名表記とした】(同)とされています。

第1節 表現しない子どもの思いを大切に ―鹿島和夫氏の聞き取りから

【鹿島和夫、1935年生まれ、小学校教師を退職後保育園の園長を勤め、現在、相談室を開設し、あのねちょう教室を開講している。教師になった頃から灰谷健次郎と知り合い交友がはじまっている。『一年一組 せんせいあのね』は灰谷との共編著で多くの人に読まれ、独自のあのねちょう教育として注目された。】(P.74 左段)

本論文を読んだことがきっかけとなって、私は約40年前の神戸大学助手時代に一度お会いする機会がありながらその後その実践について学ぶ機会を失ってしまった鹿島和夫先生の著作を読み始め、読むうちにすっかり鹿島ファンになってしまいました。できることならお目にかかってお話ししてみたいと思っていたのですが、残念ながらお亡くなりになったと最近知人に教えていただきました。鹿島和夫先生の御冥福をお祈り致します。

私がこれまでに通読した鹿島先生の著作は以下の通りです。

鹿島和夫・灰谷健次郎『一年一組せんせいあのね』(理論社 1981)

鹿島和夫編『続一年一組せんせいあのね』(理論社 1984)

鹿島和夫・灰谷健次郎『一年一組せんせいあのね それから』(理論社 1994.7)

鹿島和夫・灰谷健次郎『一年一組せんせいあのねいまも 』(理論社 1994.7)

鹿島和夫『希望をありがとう ダウン症児・由子ちゃんと一年五組の記録』(講談社 1987.3.20)

さらに以下の本も入手し、読もうとしています。

鹿島和夫『ダックス先生と40人の子どもたち 1ねん1くみの365日』(小学館 1983.3.30)

鹿島和夫『1ねん1くみダックス先生』(小学館 1987.4.10)

鹿島和夫『しあわせのおなら』(法蔵館 1995.7.10)

鹿島和夫『せんせい、あのね ダックス先生のあのねちょう教育』(ミネルヴァ書房 2010.2)

吉益論文に戻りますが、本節での鹿島先生からの聞き取りとそれについての吉益氏の分析の基軸は、鹿島氏が1973年に赴任した神戸市御影小学校での齋藤喜博との出会い、齋藤喜博による鹿島先生の実践記録への一方的批判や授業介入、それへの鹿島先生の怒りと反発、齋藤との決別、その後に「あのねちょう」実践が展開されていく、という流れであると私は理解しました。私自身はもっぱら、1980年代に鹿島先生が一年生の子どもたちに「あのねちょう」を与えて自由に詩を書かせ、学級通信に載せたり本として刊行されるその経緯を読み、子どもたちの詩、子どもの大人観察の様子に大笑いしたりしんみりしたりしながら楽しんできましたので、その前段の1970年代の鹿島先生の教育実践においてそのような確執があったことは想像しにくかったです。

吉益氏は、以下のように評しています。

【鹿島は子どもの詩を読み、子どもたちと読みあう中で子ども理解を深め、自らの教師論を構築していった。齋藤への怒りは齋藤の実績を認めつつも「権威的にふるまった」齋藤の教師論とは対極の教師論の確立につながった。教師らしくない教師とは鹿島の教師論であり、あのねちょう実践は目の前の子どもの現実から出発して自らの教育実践を確立した。】(P.75 右段)

私は鹿島・灰谷『一年一組せんせいあのね いまも』(1994)のP.146に掲載されていた以下のような詩を思い出しました。

先生 きど しおり
先生はマラソンのはなしをしていました
とつぜん「しっー」て先生はいいました
そしたら大きなおならを
「ぷっ」とこいたのです
みんなで「くさっ」ってゆったら
先生は「みんなはしあわせだね」ってゆった
「だって先生のおならがきけたからや」だって
そのことをおかあさんにゆうたら
「先生もとしがいったから女にもてへんのやなあ」
とゆったよ

まあ、教室でおならをしてその音を子どもに聞かせる教師、と一般化して書いてしまうと、いろいろご意見もあることでしょうが、詩の中でしおりちゃんが描く教室の雰囲気、しおりちゃんの家でのおかあさんとの会話を読むと、「教師らしくない教師」鹿島先生は子どもたちや親たちに受け入れられていたんだらうなあ、この雰囲気から親にも教師にも容赦なくものが言える子どもの作品が生まれてきたんだらうなあと思います。

私のここまでの鹿島実践の読書は、まだまだ子どもたちの作品のおもしろさ、魅力に引っ張られてしまっています。多くの著作を物しておられる鹿島先生ですが、私がこれまで読んだ範囲では、ご自身について語られている部分は多くありません。引き続き読書を続け、文献から可能な範囲でも鹿島和夫先生の教師としての自己形成史をさぐってみたいと思っています。

第2節 子どもの前で謙虚に —西條昭男氏からの聞き取り

【西條昭男は1944年生まれ。小学校教師として37年間勤め、生活綴方教育の実践に一貫して取り組んだ。その間、京都市のサークル連絡協議会の会長、日本作文の会副委員長、京都市教職員組合委員長、京都教育センター機関誌『ひろば』の編集長をしている。】(P.75右段)

西條昭男先生の著作の中で、私は吉益論文の中で最初に引用されている『どの子も見える魔法のめがね』(清風堂書店1994)を読みました。その次に引用されている『心ってこんなに動くんだ 子どもの詩の豊かさ』(新日本出版社2006)と、昨年刊行されたばかりの『そんなに「よい子」でなくていいから』(文理閣2022)もこれから読もうと思います。西條先生の『どの子も見える魔法のめがね』はとても魅力的な本です。同書の「1子ども基地から 26のメッセージ」の一番最後の部分「5 先生、お元気ですか(教え子の訪問)」に、卒業してから先生を訪ねてきた教え子との5つのエピソードが書かれています。その中からひとつだけ紹介します。

新たな第一歩 その前夜

ある夜、先生の家玄関に、3・4年を担当した松つつんが立っていました。卒業して6年、高3になっていました。松つつんは卒業して明日からホテルに就社します。松つつんは在日朝鮮人ですが、差別されず採用されました。彼は本名か日本名のどちらを名乗るかで悩んでいます。18年の松つつんの人生は、高校入学頃から父親の大きな借金、失踪、残った家族による借金返済と大きく揺れました。長男の松つつんはアルバイトに追われま

したが、なんとか退学せずにここまで来ました。その中で在日朝鮮人の問題も考えるようになり、本名を名乗って差別されている事実も知っており、日本名ならずと日本名だろうと言います。しかし、「先生、どう思いますか？」とは問いません。

当時の教室の子どもたちの消息など雑談した後、先生が今晚どうして訪ねてきたのかと問うと、【それは日記の返事だと松つつんは言いました。先生が四年生の頃の日記に、これから大きくなっていろいろとつらいことや考えんとあかんことが出てくるだろうが、がんばるように、というようなことを書いてくれていたからだ。どのような内容の日記の返事に書いたのかはすっかり忘れてしまったのですが、たしかに私は松つつんにそのようなことを書いたことがあります。】(P. 146-147)と先生は述懐します。

【松つつんは体育万能で心やさしく、みんなから好かれる子でした。私は今でも、松つつんが書いたやさしくてかわいい詩や作文の二つ三つを思い出すことができますし、文学作品の『ごんぎつね』の感想文などもそのエンピツの跡といっしょの鮮やかに思い出すことができます。】(P. 147)

一方松つつんは在日朝鮮人であり、表通りに一つの地蔵尊、細い路地の奥の朝鮮の人が多く住むところにもう一つの地蔵尊があって、地蔵盆も二つに分かれて行なわれるような地域に住んでいました。

【心やさしく、友だちとも楽しく遊んでいた十歳の松つつんは、これらのことにまだ十分意識的ではありませんでした。この松つつんの将来に大きく立ちふさがらるであろう朝鮮人なるがゆえの諸問題を思いやると、強く生きよと励まさずにおれなかったのです。朝鮮という文字はひとつも出さずして……。】

その私の思いや言葉がどういう形で松つつんの内に入り、今までどういう意味を持ってきたのかは、言葉少なく語る松つつんからはわかりませんでした。ただ私は、松つつんの話聞きながら、そうだったのかと、あの頃の松つつんのノートの字を思い出していたのです。】(P. 148)

帰り際、松つつんは先生がみやげに渡した綴方教育の本の裏表紙に先生の名前を書いてほしいとリクエストします。

【ペンをとって私は松つつんに、「松つつんにと書くか、本名で書くか」と言いました。「沈です。沈と書いて下さい」このとき、松つつんははっきりと言ったのです。その目には強い光がありました。私は、「沈秀高君へ、西條昭男」とゆっくりと書きました。

松つつんは玄関で靴をはきながら、「きてよかったです」と小さな声で言い、「そうか」と私はこたえました。】(P. 149)

西條先生の教え子が卒業後何年も経ってから先生に会いに来るエピソードを紹介しました。

なぜ同書のリアルタイムの教育実践の部分ではなくて、卒業後のエピソードを紹介したのか。それは、紹介したエピソードが、西條先生と子どもたちのリアルタイムの出会い、関わり、そこでの西條先生の働きかけの「意味」はなんだったのかを私たち実践記録の読者が検証する手がかりになると考えたからです。

単純なことなんです。卒業して数年とか十年近く経っているのに、かつての教え子がなぜ西條先生に会いに来るのか？ 一人一人のケースは多様で決して一般化できないですけど、それぞれ人生の岐路とか悩みの渦中であって、しかも先生に「答え」を求めて会いに来たというよりは、自分なりに悩みや判断に区切りをつけようとして、それを見守り立ち合ってくれることを先生に求めて、彼らは会いに来たんじゃないかなと私は思います。

私は三重大大学の30年の在職期間に、約80人の学生・院生などをゼミに迎え送り出してきましたが、彼ら彼女らの卒業終了後の私との個別の交流を思い出してみると、その機会は数えるほどしかなかったと思います。要するに、私と学生たちとの関わりは《薄かった》んです。そこに満足しなければならない、見返りを期待してはいけない、と考えていました。そのスタンスでいる方が、ささやかな交流であっても喜びを感じられる、教師冥利に尽きると喜べる、とっていました。自分がそういう教師人生を送ってきたので、西條先生と教え子たちと

の関わりを、うらやましく思います。もちろんそれは思ってみてもしかたのないことです。1年とか2年間毎日続いた子どもたちと西條先生の関わりがあり、その延長にこそ何年か後の再会があるわけです。西條先生と自分の「教師生活」はほとんど全く違うけれども、こういう教師と子ども&卒業生の出会いもあるのだということに、すごく魅力を感じました。

吉益論文に戻ります。

本論文で【生活綴方の実践と現代の生活綴方実践について】(P.75右段)として紹介されている西條昭男先生の語りを一部抜粋して紹介します。

【かつての子どもたちは、(中略)嫌なことを嫌と言いなさいと言ったら、嫌と言えるような状況があったと思うけど今はそんなことが言えるものではない。ちゃんと自己規制が働きます。そういう意味では今の教師の方が、昔の教師よりももっと、その子どもの表現の向こうにあるものを読み取る力をもたなければならないのは間違いないでしょう。(中略)先生が、その子どもがよくわからないとか、よく見えてこないというときに、それは今の子どもが悪いとか、今の子どもだからと思うと思考停止になる。今の教師が今の子どもとどう対峙しているか。ひよっとしたら自分は上から目線で子どもをみているのではないか。こんなこともできない子どもというふうにみえていないか。自分ができないからいらいらして子どものせいにしていないか。それをもう一度ひっくり返して、自分の目線が、ひよっとしたら子どもの目線より高すぎてないか、あるいは、なめてるのかもわからないという、自分に対する自制心を働かせる契機になるかもわからないと思う。だから「俺が変えてやる」なんておこがましい。子ども自身が見せてくれる、そういう場面に、自分が出合わせてもらっている。幸せなことにであわせてもらっていると思うことです。】(P.76左段)

吉益氏は、西條先生の上記のような子どもを捉え子どもと関わる姿勢を【西條の生活綴方教育の生命線】(P.76左段)であるとした上で、西條先生の生活綴方の特徴を以下の2点にまとめています。

第1点は、【子どもの表現を大事にして、どんな学級を持った時も自然な表現を大切にした】(P.77左段)こと、その根底には【子どもたちが自分の力で、時間はかかっても変わっていくことができるという揺るがない確信、子ども観】(P.77左段)に支えられていること。

第2点として、西條先生が子どもたちに綴らせる時、【子どもたちの小さなしぐさ、思い、表情を的確に捉えることを自らの生活綴方実践の目的とした】(同)こと、そして同時に西條先生自身も実践記録を書いてサークルで交流し、それが自らの教師としての成長に繋がったこと。

第3点として、【教職員をとりまく様々な政策側の掲げる課題に対して教職員組合や地域の父母とのつながりを通して確かな分析をした】(同)こと、【教職員組合の一員として、生涯、担任として貫き通せた】(同)こと。

この第3点については、西條先生の実践記録を読むことだけでは掴めないと考えて、吉益論文の註で紹介されている、京都教育センター編『風雨強けれど光り輝く 検証！京都の民主教育 1978-2010』(つむぎ出版 2010)の中で西條昭男先生が執筆されている「第8章 京都市の教育」を読みました。私は1986-2019年は京都を離れていてほとんど知らないことばかりでしたが、この間京都市の教育行政がいかに酷い教育破壊や教師いじめを行ってきたか、これに対して教職員組合や民主勢力がどう闘ってきたかがよくわかりました。京都市教職員組合執行委員長を勤められた西條先生はまさに闘いの渦中におられたわけです。

(つづく)

※佐藤さんの研究ノートに拙文をとりあげてもらい大変 光栄です。ありがとうございます。

いくつかのご指摘から自分が気がつかなかったことがわかりました。鹿島和男さんの教師論のイメージがふかまりました。最近お亡くなりになったそうです。合掌

子どもを育てるって共同なしにはできないと思うんですが・・・

（チャレンジクラブ 大西真樹男）

今、子どもを育てることが難しくなっています。出生率の低下はその一つの現れだと考えられます。その背景にあるのは、「共同」する力の衰えがあるように感じています。本来子どもを育てるには、子どもに関わる人々の「共同」こそが最も必要であると考えられるのですが、現在はそれほど重視されていないように感じます。家庭あるいは親の責任、教師の責任、時には子どもの責任などは問題にされるのですが、「共同」が重視されていないことへの問題意識は希薄と言わざるを得ません。

子どもを育てるということは、きわめて社会的な営みであり、すべての人々が様々な形で関わるべき営みであるはずで、換言すれば、住民の参加が重要であり、それは民主主義の課題にもつながるものだと言えます。

長岡京市学童保育保護者会連合会が京都学童保育連絡協議会を脱退したという話を聞きました。昨今の子どもをめぐる状況からは、保護者・おとな達が手をつなぐことが求められているのではないかと強く思うのですが、その真逆の動きと言わざるを得ません。長岡京市では、この間学童保育が民営化されてきました。今回の脱退はそういう中での動きです。（なにも民営がよくないなどというつもりはありません。なにせ我々のチャレンジクラブもれっきとした民営である。ただ、民営にいたる経過とその質をみないといけない。）

全国から、PTA（育友会）からの脱退、あるいは解散などが聞こえてきます。保育所などで保護者会がないところもあり、それを「売り」にしているのです。また、共働きのうえに長時間労働などが、おとなを子育てから遠ざけようとします。（もちろん、組織のありかたを議論することは大切なことで、今の時期に必要な活動のスタイルを議論する必要はある。）

保護者が、おとながつながりにくくなりました。コロナ禍のせいとも言えますし、SNSの広がりによって人間関係が様変わりしたとも言えましょう。自己責任論をあおる政府やマスコミの戦略もあるでしょう。新自由主義は何でも商品にしまい、サービスを買うという発想で子育てを考えている保護者・おとなが現れても不思議はありません。保護者会の懇談会で、我が子の家での生活の様子を語り合うことを嫌がる保護者もいるとか。

しかし、一皮めくれば「つながり」を求めている保護者・おとなは多いと考えます。それは人間が本来持っている欲求です。様々な環境によってそれが眠らされているのではないかと考えます。例えば、チャレンジクラブは、親の共同の力で子どもを育てていこうと、困難な条件の中その歩みを始めました。保護者・おとなを子育てから遠ざけようとする力が働く中、だからこそ共同することをおとなたちは求めたのです。

おとなが共同している姿を子ども達に見せることは何より民主主義の学習になるはずで、仲良しファミリーでキャンプに行くのもいい、共通する趣味で楽しむのもいい。それをインフォーマルな公共の場にしてはどうかと思うのです。そうすればきっと民主主義の基礎となるはずで。

※チャレンジクラブの代表として奮闘する大西さんの言葉は重い。私の過去の体験は昔話かもしれないが、学童の中での保護者のつながりは楽しかったし何より面白かった。大変なこともあったけどわが子とともに成長させてもらった空間でした。大西さんの意見に同感です。 次回は井上さんの予定です。

読書・映画・DVD・CD 情報（趣味的ですいません）

- ① 震える牛 相場英雄 小学館
『ガラパゴス』を読んでから相場の作品をいくつか読んでいる。主人公の田川警部の愚直な生き方に魅力を感じてその第1作をよんでみた。牛肉をめぐる畜産農家と加工食品、販売業者との癒着の構造を捜査という人と人との対話を通して解き明かしていく。現代の問題と鋭く対峙しているのも魅力。
- ② 山本周五郎ユーモア短編集 山本周五郎 本の泉社
ユーモアと笑いの本質を短編小説の中に山本はさりげなく描く。読んでいてユーモアのセンス、難しさも考えさせられる。「強さ」の中の弱さ、「弱さ」の中の強さについても。
- ③ 台湾の少年 1～4 周見信 作 岩波書店
岩波書店が発行した漫画。台湾の漫画の邦訳。1930年うまれの実在の児童文学に貢献した一人の人物の台湾の歴史の中で生きた波乱万丈の人生を丁寧に描いた力作。戦後史を深める意味でも読み味わいのある骨太の力作漫画。
- イーディー、83歳はじめての山登り サイモン・ハンター監督 2017年英国作品
人は年を重ねても挑戦や新たな模索は不可欠だ。そんな事を考えさせる映画。佐藤博さんは「人生を楽しむに遅すぎることはない」と、この映画を紹介している。主役を演じたイギリスの名優は撮影時に83歳だったという。

編集後記・よもやま話

※5月号は野中講演の特集です。講演のレジメ、参加者の発言の記録です。じっくり読んでください。関連資料として岸本さんから貴重な記録をいただきました。オンライン開催はリスクもありますが遠方からの参加が可能なのは魅力です。いくつかの不具合ご容赦ください。佐藤前委員長に参加していただき深い学びができました。佐藤研究ノートは拙論にたいする丁寧な分析、リレー連載 大西さんの文章は現場からの生の声。ラインやSNS、便利なものは使えばいいが、あくまで道具。人と人との生のつながりに勝るものはないとあらためて思いました。

※統一地方選挙、厳しい結果です。民意はなぜか維新に流れている。政治にたいする不満生活の悩みに論理と情の両面でこたえる魅力的な政党、組織が必要ですね。民意がすべて維新に傾いてはいませんが現状は残念ながら、そこに流れています。その分析と対策が急務と思います。

※阪神タイガース、少しばかり好調です。大きな期待はもたずに応援していますが、守備が確実にってきたことと、監督の明確な哲学？がはっきりしている事が嬉しいです。

※5月、新緑の季節ですが昔から5月病と疲れがでる時期です。今年は桜、つつじと例年より早く咲きました。植物の元気にまけないように過ごしたいものです。お身体ご自愛ください。